

北響堂山石窟における北齊様式に関する一考察

京都大学 謝 振發

6世紀半ば頃から北齊の都、鄴（現河北省臨漳県）の北西に相継いで造営された南・北響堂山、水浴寺などの諸石窟は、都が洛陽から遷都してきたことにより新たな仏教美術の華を咲かせた北朝末期石窟の代表作である。これら北齊石窟、とりわけ北響堂山三大石窟造像の展開については、北洞に表された如来・菩薩像の先進的な造形が中洞を経て急速に失われ、それに代わって南洞ではやや保守的な造像が登場してきており、北齊様式の成立の状況を窺うことができる。すなわち、新しい外来様式が鄴都に流入し、次第に伝統的な様式と融合していくという北朝化の様相を想定することができるのである。しかしながら、南洞の諸尊像の形式表現が東魏の作例に遡って認められる点は、こうした様式変遷が単なる時間的な推移ではないことに注意すべきでもある。

本発表は、これらの問題を考慮に入れながら、北響堂山石窟における造像様式の変化を、造営者と地方的様式の両面から比較検討を行い、この時期の北齊造像の実態を明らかにしようとするものである。

まず、造営者の問題であるが、これについては、唐邕が関わった『維摩経』刻経の石窟内の位置や窟外北側岩壁に刻まれた『孝経』の内容などから、北齊文宣帝が開鑿した北洞に対し、南洞の造営には唐邕なる人物が関与していた可能性が強いことを指摘しておきたい。すなわち、北洞から南洞への変容は、その造営者と関連性があることが推測できる。ところで、南洞に表われたやや保守的な彫像は、慧義や定禅師などの僧侶が造営した南響堂山第1・第2窟、水浴寺石窟などにも見られる。北齊鄴都周辺の諸石窟の様式が、南洞などの諸石窟と、北洞を代表とする帝王窟との2つのグループに分かれることを示唆していると見られる。

次に、それぞれの様式の起源の問題である。まず、北洞と中洞との先進的な形式的表現については、先行研究の成果を踏まえて、インド・中央アジアの仏像様式、或いは四川省出土南朝造像にその形式・様式上の源流が溯り、帝王窟としての宮廷派の様式が次第に形成されていったことを明らかにしたい。一方、南洞の諸像の彫刻全体が体軀の左右対称性を守った硬直した造形を示すなどの保守性については、東魏以来の河南省東北部・河北省など太行山脈沿いの諸地域にある地方的様式に求めるべきであろう。これについては、鄴都周辺諸石窟を含む太行山脈沿いの諸地域に存在した東魏・北齊二代の造像様式を分析しながら、そこに集まっていた高僧が鄴都でも活躍していた事実をも踏まえて、南洞の造像様式の由来を明らかにしていきたいと考える。

以上の検討を通して見る北響堂山石窟の様式展開についての見解は、東魏以来の鄴都を中心とする仏教彫刻様式が優越性を保ちながら、南洞造像のみならず山東省青州出土の北朝末期像など、各地域に多様な地方様式が出現する北齊時代の造仏の実態を明らかにしてくれるであろう。